

日本生態学会関東地区会

# 会 報

第 30 号

August 1981

## 目 次

例会報告 .....	1
1) 昭和55年度地区例会 .....	1
(a) 第2回例会 .....	1
(b) 第3回例会 .....	1
2) 昭和56年度地区例会 .....	3
(a) 第1回例会 .....	3
(b) 第2回例会 .....	5
関東地区大会（1980年度）報告 .....	7
事務局だより .....	15
1) 総会報告 .....	15
2) 事務局より .....	16

## 例 会 報 告

### 昭和 55 年度地区例会

#### (a) 第 2 回例会

- 日 時 : 1980 年 11 月 29 日 15:00 - 16:30  
場 所 : 東京都立大学目黒校舎  
演 者 : Prof. A. Hillbricht Ilkowska ( Head of Department of Hydrobiology,  
Institute of Ecology, Polish Academy of Science )  
演 題 : Influence of artificial fertilization on lake functioning — An approach  
towards experimental limnology.

#### 講演要旨

演者はポーランドの女流科学者で、世界的に著名な動物プランクトンに関する生態学者である。1980 年 8 月より約半年間京都大学大津臨湖実験所に滞在し、陸水学の研究をされた。本講演は 1970 年から 1975 年にかけて、ポーランドの 4 つの湖で行なわれた富栄養化に関する研究を紹介したものである。人工処理をした後の一次生産、pH、Ca、等の変化を測定している。

(松本忠夫・文責)

#### (b) 第 3 回例会

- 日 時 : 1981 年 1 月 19 日 15:00 - 17:00  
場 所 : 筑波大学生物農林学系棟  
演者及び演題 :

- (1) セントヘレンズの爆発とその森林被害 森川 靖 (林業試験場)
- (2) 多肉植物の光合成の制御 吉川 昭雄 (公害研究所)

#### 講演要旨

##### セントヘレンズ火山の噴火と森林被害

森 川 靖 (農林水産省林業試験場)

1980 年 3 月 27 日、123 年の眠りからさめて、米国ワシントン州のセントヘレンズ火山は本格的な噴火活動を始めた。とくに 5 月 18 日の大噴火は近來まれにみる噴火で、90 名をこえる死者、行方不明者があり 4 万 ha の森林を吹き倒した。噴火による二次的な被害も莫大で、日本の冷夏の原因もこの噴火活動によるといわれている。

噴火活動の概要 セントヘレンズ火山周辺では 3 月 20 日から地震が発生した。M 3 以上の地震が 3 月 22 日から 4 月 25 日にかけて 2,130 回もあった。噴火活動は 3 月 27 日から始まったが、5 月 18 日の噴火が最大で、10~50 メガトン級の核爆発に相当するといわれる。噴火にともなうショッ

ク波や気圧波は世界各地で観測され、日本でも記録されている。

2,950 mの山は噴火によって頂上から400 mの部分を使い、U字形の巨大な火口（東西1.5 km、南北3 km、深さ1 km）が形成された。

噴煙は高度20kmまで上昇し、成層圏まで達した。降灰は火口から北東に拡がり、3日後には米国東海岸に達した。降灰の厚さは地域によってまちまちで、300 kmも東方で7 cmの降灰があったという報告もある。成層圏に達した微粒子の灰はエアロゾル層として世界各地で観測され、筑波では5月29日に観測されている。

山腹の水河や雪をとかしこんだ山崩れや岩なだれの堆積物は泥流となって川ぞいに流下し、洪水となった。洪水面積は6,100 km<sup>2</sup>といわれる。

森林の被害 大噴火地点からの岩なだれにともなって強力な突風が吹き、4万km<sup>2</sup>の森林が吹き倒された。吹き倒された森林周辺の樹木は200～300℃の熱風のため立ち枯れをおこした。一部の山腹面では水平方向に倒れた樹木が並び、その上方に立ち枯れた林の帯、さらにその上方に生き残った林の帯が層状にならび、突風が弾丸のように水平方向に走ったことを思わせた。

林地をおおった降灰は、降雨で表面がコンクリート状にかたまり、注意すれば降灰表面を自由に歩けるほどだった。米国林野庁では厚さ10cm以上の灰がつもった林地が39,000 km<sup>2</sup>に達したと推算している。

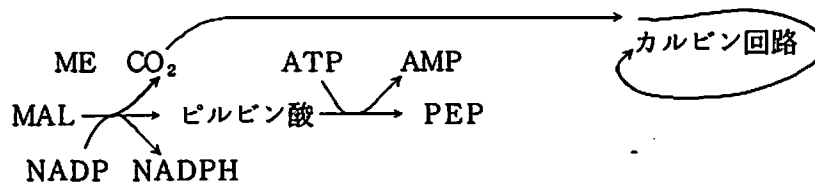
### 多肉植物の光合成の制御

古川 昭 雄 (国立公害研)

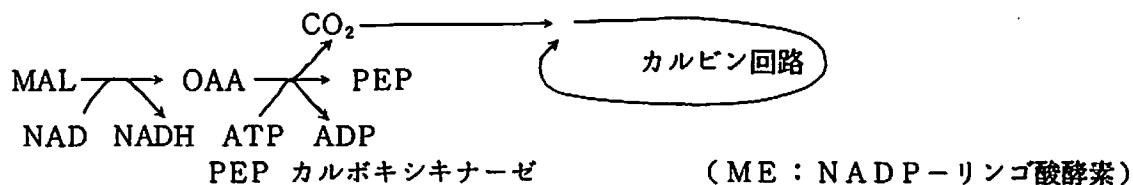
多肉植物の中にはCAM (Crassulacean Acid Metabolism) 型の光合成を営む植物が多い。CAM植物の特徴は有機酸の蓄積・消滅の日周期があり、有機酸の主成分がリンゴ酸 (MAL) であることである。有機酸の合成は夜間に行なわれ、大気中より気孔を通して吸収されたCO<sub>2</sub>は



の反応によると考えられている。合成されたMALはバキュオールに蓄積され、昼間次の反応によって分解されカルビン回路によってデンプンが合成されると考えられている。



もしくは、



環境条件、例えば水ストレスや日長条件によりある植物はC<sub>3</sub>型の光合成からCAM型の光合成へと移行する。水条件が良好な時には有機酸の日変動は起らず、水条件が悪化するとCAM植物に特有の有機酸含量の日変動が観察されるようになる。K. Winterによれば、水ストレスによって*Mesembryanthemum crystallinum*のPEPカルボキシラーゼの活性化が見られ、このことがCAM化をひき起しているとしている。しかし、筆者が*Portulacaria afra*を用いた実験では、水条件が良く、有機酸含量の日変動がない時にも有機酸含量は高く、脱塩したPEPカルボキシラーゼの活性は高かった。すなわち、ある種の植物ではPEPカルボキシラーゼの潜在的活性は高く、MALによって活性がマスクされているものと思われる。I. P. TingはABA(アブサイシン酸)処理によって気孔を閉じさせるとCAM化が起ると述べており、気孔閉鎖による葉内CO<sub>2</sub>濃度の上昇がC<sub>3</sub>型からCAM型への移行に何等かの役割を果たしているとも考えられる。

CAM植物によるCO<sub>2</sub>固定に関する問題点は数多く残されており、今後の研究に待たなければならない。最近、C<sub>4</sub>型からCAM型へ移行する植物も見出され、光合成の研究は、C<sub>3</sub>、C<sub>4</sub>、CAM植物の相互関係に注目して行なわれている。つまり、これまでの光合成の炭素代謝の研究は種の特異性に着目し、それを説明しようとする方向になってきており、生態学的にも興味ある事実が数多く発表されるようになってきている。

## 昭和56年度例会

### (a) 第1回例会(島の生態学—伊豆・小笠原を中心にして—)

日時 : 1981年5月16日 13:00—16:30

場所 : 国立科学博物館附属自然教育園講義室

演者及び演題 :

- (1) 島にすむ鳥の生態と行動 樋口広芳(東大・森林動物)
- (2) 伊豆・小笠原のネズミについて 矢部辰男(神奈川衛研)
- (3) 島嶼フロラの起源と特性 小野幹男(都立大・牧野標本館)

### 講演要旨

#### 島にすむ鳥の生態と行動

樋口広芳(東大・農・森林動物)

小さな島の鳥相は、本土の鳥相と比べて貧弱なのが特徴である。この鳥相の貧弱さは、本土に

いる近縁種の多くやある特定の分類グループの鳥が、島に欠如していることからきている。それらの鳥がない理由は、単一ではない。強い飛翔力をもった鳥、特に渡り鳥などの場合には、本土と島の間にある海が分布を妨げる要因になっているとは考えにくい。こうした鳥では一般に、近縁種の欠如は、小さな島におけるよりきびしい種間競争の結果として、またグループ全体の欠如は、好適なすみ場所や食物の不足の結果として生じてきているように思われる。

本土にいる数種の近縁種のうち2、3種が島にすみついている場合、それらは、体の大きさが著しく異なるものの組合せからなっていることが多い。たとえばキツツキ類では、2種の場合、アオゲラとコゲラ、オオアカゲラとコゲラの組合せは見られるが、オオアカゲラとアオゲラ、オオアカゲラとアカゲラの組合せは存在しない。これは、小さな島では、体の大きさが充分異なっていて採食習性も著しく異なる種どうししか共存できないことを示唆している(樋口, 1979; Higuchi, 1980)。

島にすむ鳥は、本土の同種あるいは近縁種の鳥と比べて、形態だけでなく、生態や行動もしばしば異なっている。これらの違いの多くは、島における近縁種の欠如か、季節変化の少ない海洋性の気候かに基因している。近縁種の欠如に基づく特徴としては、地味な羽色、さえない囀り、生活資源の広範囲な利用などを、代表的なものとしてあげることができる。伊豆諸島の鳥を例にして言えば、イイジマムシクイの頭中央線の欠如、アカコッコのさえない囀り、ホトトギスの托卵相手の拡張、シマセンニュウのすみ場所の拡大などが、そうした例の中に含まれる。海洋性の気候に基因する特徴としては、生息密度の増大、一腹卵数の減少、2回目繁殖の減少、巣立ち雛の独立の遅延などが、代表的なものとしてあげられる。伊豆諸島の鳥の中では、イイジマムシクイやヤマガラなどにそうした特徴がよく見られる(Higuchi, 1976; 樋口, 1978, 1981; Higuchi & Momose, 1981)。

Higuchi, H. 1976. Comparative study on the breeding of mainland and island subspecies of the Varied Tit, *Parus varius*. 鳥, 25: 11-20.

樋口広芳. 1978. 鳥の生態と進化. 思索社, 東京.

樋口広芳. 1979. 島にすむ鳥の生態. サイエンス, 9(8): 74-88.

Higuchi, H. 1980. Colonization and coexistence of woodpeckers in the Japanese Islands. 山階鳥研報, 12: 139-156.

樋口広芳. 1981. 《おみくじ引き》をする鳥の生態. 『無名のものたちの世界IV』pp. 3-28. 思索社, 東京.

Higuchi, H. & Momose, H. 1981. Deferred independence and prolonged infantile behaviour in young varied tits, *Parus varius*, of an island population. Animal Behaviour, 29: 523-528.

## 伊豆・小笠原のネズミについて

矢部辰男(神奈川県)

いわゆる家鼠類であるドブネズミ (*Rattus norvegicus*), クマネズミ (*R. rattus*) およびハツカネズミ (*Mus musculus*) は伊豆・小笠原の諸島にも侵入, 分布している。しかし島によってこれらの一部のみが分布する場合と, 競争種とされる種が同所的に分布する場合などがある。

黒田(1930)や渡辺(1962)によれば, 1920年代の終りには父島と母島のそれぞれに, 上記3種が分布していた。ところが最近の調査結果からみると, 両島のうち父島からはドブネズミが消滅したと推定された。

伊豆鳥島には木本類はまばらに分布し, 背の低い草本類が優占している。ここにはクマネズミのみが分布し, 本来樹上性あるいは半樹上性の本種が, 地表生活をしているといえた。それは胃内容や, 地下トンネル型の巣, 内部寄生虫相からも推定された。

八丈島には家鼠3種の記録があるが(加納, 1952; Tamiya, 1962), その後のイタチの導入が鼠相にどのような影響を与えているか, 調べる意義があろう。ハワイではマングースの導入によってドブネズミが減少したという(Baldwin et al, 1952)。

三宅島の畑周辺の浅い森林内には, ドブネズミとクマネズミが同所的に分布していた。しばしば種間競争の例に挙げられる両種であるが, ここでは行動習性や食性が種間で異なることが, 同所的分布を許す一因になっているであろう。

なお, 以上はクマネズミが優占する島であるが, 東京湾内の人工島, 第2海堡にはドブネズミのみが分布する。

これら家鼠類の分布を決定している要因は必ずしも明らかでないが, 島によってそれぞれ異なると考えられる。

### (b) 第2回例会

日時 : 1981年7月11日 14:00—16:00

場所 : 筑波大学生物農林学系棟

演者 : Prof. W. Larcher (Innsbruck University, Austria)

演題 : 森林植物の生理生態

#### 講演要旨

植物の生理生態学の分野で, 大変巾の広い研究を続けておられる Larcher 教授の講演会は地中海性気候における硬葉樹の生理生態に関するものであった。Larcher 教授の広い研究分野の中から特に硬葉樹を選ばれたのは, 日本に特徴的な照葉樹と比較できるようにと意図されたのだろう。特に強調されたのは, 植物の生長, 生産に阻害的に働く気候要因が, 日本では冬の寒さだけであるのに対し, 地中海性気候のもとでは, 夏の乾燥と冬の寒さとの両者であるということであった。

我々の常識は地中海性気候の冬は温暖多湿で植物の生長にとって好適であるというものだが、例として *Olea europaea* の冬期の光合成が場所によっては非常に低下していることを示されたことが印象的であった。夏の乾燥については、かなりきびしいものであり、植物の水分ストレスと光合成活性との関連でまとめてみると、Xerophyte と Mesophytes の間にあるとのことであった。夏の乾燥に対する適応として *Olea europaea* が乾燥とともに蒸散効率を増していく詳しい実験結果が示された。このようなことと比べると日本の夏に適応している陽性植物は、Mesophytes といってよいであろう。しかし、日本の照葉樹についての生理生態的研究は、まだ遅れており今後の研究が待たれるところである。Larcher 教授はヨーロッパでは生理生態学者が非常に少ないと言っておられたが、日本でも、この分野は今後、開拓されるべき所であろう。

(丸田恵美子・文責)



## 関東地区大会（1980年度）報告

### 地区大会準備会

1980年度の関東地区の大会が1981年3月20日と21日の両日、茨城県水戸市の茨城大学理学部で開催されました。地区の中心部の東京からかなり離れた会場での大会でしたが、125名の参加者があり、2日間かなり密度の高い大会を開催することができました。今回の地区大会は、シンポジウムや懇親会の開催、2日に亘る会期、大会参加費の徴集など、これまでの関東地区大会とは異なる試みがいくつか行なわれ、いろいろな評価を受けているようです。開催日からもう大分時間が経ち記憶もいささかあいまいですが、ここでもう一度いくつかの事柄について振り返ってみて大会の報告に変えさせてもらいます。

#### ○準備会のこと

「1980年度の地区大会は水戸の茨城大学を会場として、会場までの交通の便などを考慮して関東地区としては始めてであるが2日間の日程で行ないたい。」という方針が出されたのは確か80年度第一回の地区委員会だったと思います。早速、茨城大学水戸地区の会員と同理学部生物学科の系統学と生態学の講座に所属している学生・院生・研究生の諸君に相談し、協力を願ったところ、「地区大会のような規模の大会ならば、我々のような地方の小規模グループの持ち味も発揮出来るかも知れない。」ということになり、茨城大学の水戸グループにやりたいようにやらせてもらうという条件で快諾が得られ、野本宣夫氏を代表として上記メンバー（一般会員9名、学生・院生・研究生計23名）による準備会が発足して準備の一切が進められました。

#### ○講演要旨集と大会参加費のこと

昨年、水産大で行なわれた地区大会において、当時の事務局の御努力で講演要旨集が作られ、なかなかよい評判でした。また、地区大会でも発表記録を要旨集として残すことは参加者の意欲を高めることになるとの声もあり、講演要旨集の作製が計画されました。要旨集作製の為の費用はとても地区会費からは出ませんので、大会参加費を徴集してそれに充当することにしました。これまでの地区大会では参加費をとった例はなかったと思います。そのため若干の躊躇がありましたが、金額を極力低くして（学生300円、一般500円）実施することにしました。もちろんこのような金額で50頁強の要旨集を業者に作ってもらうわけにはいきません。準備会メンバーの中のいく人かの練達の士による努力と幸運により、54頁手書きオフセット風の講演要旨が無事参加費の範囲内ギリギリで作成されたわけです。

#### ○シンポジウムのこと

2日間一般講演だけということも芸がありません。そこでシンポジウムのようなものを初日に行なおうということになりました。開催地の特徴を生かして北関東に関する話題でまとめようかという案もありましたが、それでは全国大会のミニ版になりそうです。そこで地区大会の特色を生

かした新しいところみとして関東地区の修士論文の競演会が企画されました。シンポジウムとは統一された主題のもとでの話題提供をいうのでしょうから、今回のように修士論文ということだけで一致している話題提供は本当はシンポジウムとはいえません。しかし、まあそんなことはいいじゃないかということになりました。話題提供者は一般講演参加者の中から修論であることを明記したものをひろい出すという方式にしました。いわば完全公募型です。いったいいくつの講演が集まるか少々不安でしたが、結局都立大2，早大2，東大・理1，東大・農・森林動物1，同森林植物1，筑波大1，茨城大2の計10題が集まり、講演時間の調整に苦勞する結果となりました。13：00からはじまり5時間以上にわたる長時間の会になりましたが、会場は100名近い参加者で常時満員の盛況でした。座長にはこの会の性格からも若い方々がよかろうということで、ちょうどドクターコースを終了する前後の方々6名にお願いしました。前述のように主題を統一した講演ではなく、話題の整理など大変に御苦勞をかけたようですが、2名づつ3組の座長団のそれぞれの工夫と御努力のおかげで討論もかなり活発におこなわれました。

このような会の意義等はいろいろと議論もあるかとおもいます。ここでは当日の座長の方々にお願いして、シンポジウムの座長としての感想をまとめていただいたものを掲載してシンポジウムについての報告とします。当日の講演要旨など参考に今後の方向など考えていただければ幸いです。

## 1980年度関東地区大会シンポジウムに参加して

可 知 直 毅

まず地区会のシンポジウムで我々若手に座長の機会を与えて下さった地区委員の方々に感謝します。私自身初めての経験であり、改めて学会発表や座長の役割について考えてみました。現在の学会発表の形式（一般講演は質問時間を含めて15分）では議論を尽くすには程遠く、座長は進行係的性格が強い感があります。シンポジウムは1題25分で多少余裕はあったものの、我々の勉強と経験の不足を差し引いても、とても充分とは言えませんでした。しかし現行の方式を採る限り、この問題は解決しないわけですから新しい発表形式（例えばポスターセッション等）を今後は積極的に取り入れるべきだと感じました。

さて、数年前に修士論文を出して幸いにしてその後も仕事を続けている私は、今回のシンポジウムについて2つの感想を持ちました。1つは、全体として生態学研究の動向を敏感に捉えた仕事が多いこと、もう1つはその中で独自の方向を求めようとしている仕事がいくつか見られたことです。生態学のように研究対象が多様な問題を含んでいる学問では、たとえ流行に乗った仕事でも頭が堅くなければ独自の見方がその中にあるはずで、そうした柔軟性が大切であると思いました。私は生態学は実証科学の一部であり、アイデアに対する実証を自然から抽出することが私の仕事であろうと考えています。その意味では今回のシンポジウムのどの仕事も、今後考えるべ

き問題を捉えている可能性があるわけで、おそらく個々の仕事は現象とアイデアの空間上のいろいろな位置に位置づけられるものと思います。

以上の話はまだだいぶ説明がいますが、最後に日本の生態学発展のためにも研究環境、特に修士卒業後の研究の機会を多くの人に与えられる制度が必要であると、懇親会場の席上で感じたことを付け加えておきます。

## シンポジウムの座長としての印象

小 泉 博

6月の半ばに、地区委員会から、生態学会関東地区大会のシンポジウムに関する報告、印象、批評等をまとめてほしいとの連絡をもらった。3ヶ月以上も前の事であり、大分印象は薄れている。講演要旨集、手もとのメモ等を見直しながら何とか思い起こしてみたい。

シンポジウム全体の印象としては、若干の問題は残しながらも、初めての企画としては成功であったと思う。特に植物関係に傾聴すべき仕事が多かった。また演者が各大学から集まった事も申し分ない。

次に可知氏と私で座長を受け持った講演に関して、私自身の印象を記してみたい。山村氏は植物の物質生産を基礎にして、暖温帯の常緑林床植物のキチジョウソウの生活環を明らかにした。この個体群の純生産量は春先に高く、冬期もコンスタントに物質生産を行う。しかし夏期には低く、8～9月には負の値をとっている。以上の様な生活様式をとる原因について強い関心がある。例えば、この種の生育環境、特に光環境、光合成特性、呼吸速度の季節性等、これらの点に関する検討は大変興味深い。私が研究を行っている常緑林床植物のイチヤクソウも全くこれと同傾向の物質生産パターンをとる。またこの種にとって栄養繁殖は、サイズ依存的に起こる。この問題を含めた上で個体群の動態、構造の解明が待たれる。調査された生育環境下での繁殖は、栄養繁殖が主である。もし異なる環境条件（特に光環境）下で有性繁殖が行われているとすれば、個体群動態に有性、栄養の両繁殖様式がどのようにかかわっているのか非常に興味を引かれる。

チゴユリとセキショウの研究は個体群に関するものである。このうちチゴユリの研究は、圃場実験と野外調査から個体群の構造と動態を解析したものである。この講演では、林床（光環境のあまり良くない）の結果が中心であるため、有性繁殖体の個体群に対する役割は入って来ない。しかしより光環境の良い林床、林縁部等では、栄養繁殖と有性繁殖の2つの繁殖方法が存在し、この点に関して更に研究を重ねる必要がある。

大石氏はセキショウ個体群で、生存、繁殖特性がサイズ依存的であることを解明した。またこの個体群に、推移行列を応用して、個体群動態の解析を行った。この手法が、チゴユリその他植物個体群の解析にどの程度有効であるのか。生育環境が不安定な状況ではどうであるのか。葉の寿命が異なった場合にどうであるのか等。その他問題点、疑問点が幅広い層から出されれば、サ

イズ依存性の問題も含めて、更に活発な議論が交されたであろう。しかし、討論が不十分であるにもかかわらず、サイズ依存性の問題、植物個体群動態の解析方法等、現在そしてこれからの植物生態学の一方向を示唆していた事は確かである。

私達若手を座長に選んで大会のシンポジウムを開催した中には、地区委員会に何らかの意図があったはずである。現在そしてこれからの生態学の動向はどうであるのか、各大学の若手の意識、意欲はどうであるのか、また若手を座長に起用し、幅広い層（若手からベテランまで）からの意見の交換を期待していたのかも知れない。

最後に、地区大会のシンポジウムとして修士論文の発表会を企画された事に対して非常に意義を感じる。今後もこの企画が継続される事を期待すると同時に、より一層の発展のために努力を惜しまないつもりである。

## 座長席にすわるまで

飯田利明

地区大会の修士論文競演会で倉本宣（東大・理・植物）、小幡和夫（東大・農・森林植物）、本間暁（都立大・理・生物）三氏の講演の座長をとの依頼を受けて以来、頭を占めるのは座長を努めるにはどうしたらよいかでした。実際に座長席にすわっていた時間よりもはるかに長い間、それ以前に冷汗のかき通しでしたので、それを主に報告させていただきます。

まず座長とは一体何を行なう役割だったかですが、記憶を振り返ってみても講演の内容は思い出すことができても座長の姿はさっぱり浮びません。演者よりも座長が目立っては都合が悪いのは当然ですから、黒衣に徹して座長をやられてこられたのだと感心し、私も及ばずながら見習うことにしました。

しかし、心配の種子は尽きぬもので、もし質問が途切れ空白の時間が生じてしまったら、座長が討論が活性化するように刺激しなければなりません。よく座長が質問のない時に自ら質問を發する姿をみうけますが、私が的に当たった臨機応変の質問をするためには、講演分野のかなり突っこんだ勉強が必要になります。本間、小幡両氏は主に森林更新がテーマであり、今まで興味は持ちながらも勉強はしていませんでした。そこで良い機会とばかりに、論文等を集め、自分の一般講演の用意はスライドを作成した以外はそっこのけで、毎日それらの論文を読みふけりました。その結果、自分の発表は当日の朝、会場の休憩室で準備しなければ間に合わない始末で、やはり同じく座長を依頼された方で同じ境遇に立たされた人は大勢いたようです。

さて当日の朝、水戸へ向う電車の中でも思いつくことは座長のことばかりでせっかくの景色も目に入らず、茨城大学へ到着しても自分の順番が回ってくるまで興味のある講演を聴く気持ちにもなれず、近所の喫茶店でお代わりの珈琲を前にして煙草をふかすばかりでした。

シンポジウムでは、座長の緊張をよそに、質問、討論も活発で空白の時間も殆んど無く、参加

者の皆様に感謝させていただきます。演者の三氏には、各人が二年間進めてきた研究の話をまとまりよく話していただき、座長の過大な質問にもよく答えていただきました。

以上のような座長の初体験は寿命の縮まる経験でしたが、この企画を立てていただいた地区会の幹事の方々にも感謝いたします。

## 座 長 雑 感

竹 中 踐

修士論文の内容はこれまでも種々の大会講演の中で一般講演に混って発表されてきたと思うが、修士論文であることを宣言して、しかも他の修士論文と並んで発表するとなると、演者はもちろんと思うが、聞く方もある種の緊張を持って聞くことができた。修士課程の2年間はひとつのまとまった仕事をするのに短くはないが、暗中模索から始めると後半の1年だけで結果をまとめることにもなりかねないので、種々の程度のデータが示されるかと思っていたが、講演のどれもが良くまとまっていたのは、自信のある者が講演を申し込んだという事であろうか。次にS-8~10の講演内容の簡単な紹介と私の感想を述べることにする。S-8の「カエル幼生の…」はアズマヒキガエルと2種のアカガエルの幼生を容器内で密度を変えて飽食状態で飼育すると、前者は高密度で、後者の2種は単独で成長が良く、野外の幼生の分布の観察と一致するという内容である。水を介しての他個体への良、悪影響が考えられ、その実体は興味ある所である。しかし演者が前置で述べた、個体群動態の内の幼生の動態の解明の為という目的からすれば、小さな容器中での実験が適切かどうかは疑問が残る。S-9の「筑波山…蝶類…」は山、畑、都市公園等に現われる蝶類の数を比較したもので、化数と食性の狭広からr戦略種とK戦略種に分け、後者は公園（不安定な環境）で少ないという内容である。従来の多化性示数と都市化の関係と同様であるが、講演の特徴は群集の構成種の考察にr、K戦略の概念を用いた事であろう。しかし地域の環境と蝶群集の関係を論ずるには、まず蝶種の依存する植物等の分布と利用状況を調査する必要があるだろう。S-10の「シジウカラとヤマガラ…」は両種は食物、番密度、卵数、寿命、社会関係等の比較で、ヤマガラは繁殖者の交代頻度がより低く、それは貯食習性等と関係している事、またヤマガラは冬期も縄ばり番関係を継続するといった内容である。両種を比較する事の妥当性はとにかくとして、聞く側からすれば、繁殖に関する数値（たとえば番当りの巢立数の小差と若令繁殖率の大差の関係についての数値など）は生命表的に示された方が良かったと思う。

## シ ン ポ ジ ウ ム の 印 象

渡 辺 守

過日、「関東の動物生態の若手はもう当分育たないだろう。」と関西の某教官達がそれぞれ豪語

しておりました。事実、全国大会に出席する関東地区の“若手”は各分野ともおしなべて少数のようで、私の関係する分野などでは、常に関西系に圧倒されているのが現状です。関東地区は会員数が全国一ですから、きっと“若手”もたくさんいるはずなのに不思議なことです。もっとも、少数でも内容が高ければよいのですが、このような場合、アクティビティの尺度は「個体数」なので、多数が同じような発表をすれば迫力があります。お互いに議論し合って、内容もそれなりに煮つまっていることでしょう。全国大会で肩身の狭い思いをした“若手”関東勢も少なくないはずですが。

大型の全国大会では講演時間も討論時間も短く、十分に意を尽せなかったり、突っ込んだ議論もなかなかできません。一方、“若手”自身も、どっぷりと自分の専門分野の中にひたってしまい、丁度、たこつぼの中から目だけ出してキョロキョロ外を見ている状態のようです。議論は自分のたこつぼの中に引きずり込んでからでないといけない……。このような傾向は地区大会でもみられます。全国大会に比べれば似たような研究をする人がもっと少ないのですから——これでは井の中の蛙になりかねません。

したがって、今回の地区大会での“若手”を育てることを大義名分としたシンポジウムは、大変意義のある試みであったと思われます。しかも、動物も植物も一括して、初日に、同一の教室で講演を行なったので、専門の異なる人も逃げ出すわけにはゆかず、頭の体操を強いられたようです。ユニークな指摘も数多くありました。講演時間のわりに質問時間が短かったことは残念ですが、これからの博士論文等の研究方針に対して有意義なシンポジウムであったことでしょう。

今回の地区大会は講演する方も聞く方も、動物関係の人は少なかったようです。しかも、対象動物においても、研究方向においてもバラバラでした。動物を扱っている“若手”の少ないことが反映されたのかもしれない。

実は、どのような質問がどれ程飛び出すのか事前には全く予想できず、蛙や蝶、鳥について泥縄的に勉強して臨んだのが本音です。ところが制限時間を超える程の質問や意見が得られました。おかげで、我が泥縄を御披露せずすみ、安心した次第です。逆に、座長として論点をもっと整理すべきではなかったかと反省しております。ただし、今回のように分野がバラバラの講演の時は、無理して総合討論の時間を作らずに、その時間をそれぞれの講演に割り当て、じっくりと討論した方がよいように思います。今後の課題として検討して頂ければ幸いです。

演者たちは視点の異なる指摘を多く受け、その後の懇親会や二次会、翌日の講演など、情報の交換や議論の機会も多く得たようです。地区会委員のしてやったりという顔が目に浮びます。このような意味から、今回のシンポジウムの試みは成功であったと考えます。

全国大会のミニ版を行なうよりは、すでに“若手”を卒業された方々と“若手”で積極的に議論を重ねてゆくことが、関東地区の研究者を育てるうえで重要なことだと思います。そのような場を提供するために、地区会としてはさらに多様な試みを行なってみることが必要ではないでしょうか。

#### ◦懇親会のこと

全国大会が巨大化してしまった現在、地区大会には意見の交換と会員相互の交流・親睦の場としての役割が特に期待されます。といってもそれを具体化するスマートな方式の名案は浮かばず、「そりゃやっぱりコンパだ」というわけで、大会参加者がなるべく多数参加し得るような懇親会を企画することになりました。多くの参加者があり、かつ満足するような懇親会の条件は会費が安く、会場が大会会場に近く、飲食物が十分であるということだとしごく当然の結論を下し、会場は大会会場内の大会議室、会費は2,000円、会場の設営と飲食物の準備は準備会メンバーで行うという計画がたてられ、開会はシンポジウム終了直後としてなるべく多数のシンポジウム参加者が懇親会にも参加して下さるように配慮をしました。その為、懇親会係となった準備会メンバーは約100名規模のコンパの準備に前日より忙殺されることになりました。日頃きたえた腕ながらやはりなかなか大変だったようです。

シンポジウム終了後、野本準備会代表の歓迎の言葉で始まった懇親会は参加者が当日の参加者の80%にもなる80名を教え、まことに盛会になりました。全国大会の懇親会とちがい院生・学生諸君の参加も非常に多く、全体に若々しさの満ちた会となり、農技研の桐谷氏の音頭で閉会の乾杯をした時にはもう22時に近かったようです。会終了後も残りの飲物や食物をかき集めての2次会が諸所で繰りひろげられたと聞いております。

#### ◦一般講演のこと

21日の一般講演には28題の講演が集まりました。地区大会ぐらいはなるべく一つの会場で講演を行い、材料や方法の異なる広い範囲の講演を聞く機会を作りたい、というのが準備会の当初の計画でしたが、一つの会場で一日に28題の講演を行うことはとても無理ですので、結局A (Animal?)会場とB (Botany?)会場の2つに分け主として動物に関する講演と植物に関連する講演を分けざるを得なかったのは残念でした。

#### ◦会場のことそして再び準備会のこと

会場に使用した茨城大学理学部の建物は運悪くちょうど大改修の最中でした。その為、講演中に騒音に悩まされたことが一、二度あり、また懇親会場の天井板が数箇所はずされてあったりして、参加者の皆様には御迷惑をかけました。もっとも懇親会場の方は煙草の煙抜きに非常に役にたってはいましたが……。また、学部の建物全体が脱靴の為皆様にはスリッパを使用していただきましたが、これも御面倒をおかけしました。

今回の大会ははじめての試みが多く、参加者の数の推定からはじまって予測のつかないことが多いのが苦勞といえ苦勞でした。結局、地区大会にしてはかなりの規模のものになり、しかもいわゆる手作り部分が多く、その意味で準備会一同よく働いたとおもっています。特に学生・院生・研究生の諸君にはほとんどの分野の仕事の準備・実施を主体的に行なってもらい、実質的に今回の大会の主催者の役割を担ってもらいました。準備会メンバーということで無報酬で活動してくれた諸氏がいなければ、今回の大会はまったく出来なかったでしょう。準備会が準備会メンバ

ーにお礼を言うのも奇異ですが、やはりお礼の言葉を記したいとおもいます。本当に御苦勞様でした。

(横井洋太・文資)

(シンポジウム座長印象記を除く)



## 事務局 だ よ り

### 1) 総会報告 (1981年3月21日, 於茨城大・理 議長 野本宣夫氏)

#### ① 昭和55年度活動報告

- 会報第29号発行
- 例会 3回開催 (本誌参照)
- 地区委員会 3回開催
- 地区大会開催 (本誌参照)

#### ② 地区会費の改訂

現在の地区会費, 年額 400 円が昭和57年度より 600 円に値上げされることが承認された。

#### ③ 会計報告 (1980年度 (80. 3. 21 ~ 81. 3. 21) 決算報告及び81年度予算)

#### 収入の部

項目	予 算	決 算	1981年度予算	備 考
繰 越 金	184,044	184,044	219,720	
地区会費	248,000	246,000	250,000	
還 元 金	170,000	174,431	170,000	
銀行利子	—	4,167	—	
雑 収 入	—	11,739*	—	*地区大会より還元
合 計	602,044	620,381	639,720	

#### 支出の部

項目	予 算	決 算	1981年度予算	備 考
事 務 費	130,000	40,055	50,000	
会 議 費	50,000	21,526*	50,000	*地区委 3回分
会報印刷費	100,000	94,500*	110,000	*29号分
会報発送費	35,000	82,460*	120,000	*29号分
謝 金	60,000	21,810*	20,000	*例会, 発送印刷補助謝礼
通 信 費	120,000	80,310	120,000	
選 挙 費	—	—	80,000	
予 備 費	107,044	60,000*	89,720	*地区大会補助
繰 越 金	—	219,720	—	
合 計	602,044	620,381	639,720	

(注) 地区大会時においては、1980年度分の学会本部より地区会への入金の一部がとどいていないという事情により、1980年度決算を変則的な形で大会へ報告したが、その後、1980年度分の入金があったので、ここではその入金分を含めた形で報告する。

## 2) 事務局より

(a) 下記の会員の方々の住所が不明です。御存知の方は事務局あて、御連絡下さい。また、住所変更された方は、地区会事務局へも速やかに御通知下さい。

赤堀 誠, 秋元和実, 脇 政人, 滝口正三, 藤田 章, 立花靖弘, 立花直美, 黒坂美和子,  
寺山 守, 草下正夫, 西沢 正, 斉藤淳子, 柚木陽子, 小関和夫, 稲毛 真, 大屋二三,  
伊藤嘉宏, 岡崎清孝

(b) 日本生態学会へ入会された方の、地区会への本部からの通知にはかなりの時間がかかっています。そのため、地区会報や、地区例会の案内等が新入会員の方にはとどいていない場合があるようです。もしそういう方を御存知でしたら地区会事務局まで御連絡下さるようお願い下さい。

## ( 編 集 後 記 )

この会報が地区会員の皆様のお手元に到着する頃には、もう夏の暑さも過ぎさってすごしやすい毎日がおとづれている頃かと思われます。今回の会報は例会報告、事務局だよりのほかに、今春、水戸で行われました地区大会の印象記を掲載する事にしました。今までの地区大会とはかなり趣の異なった大会でしたので、準備委員会の方々も大変だったろうと思われます。又、シンポの座長には若手の方々を動員して新趣向をこらしましたが、出席者の印象はどうだったでしょうか。

私達の会報委員としてのお役目は、この号でおしまいです。次号からの新委員の御活躍を期待します。

(藤井 記)

---

## 会報第30号

1981年8月31日 発行

編集責任者 藤井宏一・横井洋太

日本生態学会関東地区会事務局

〒305 茨城県新治郡桜村

筑波大学生物科学系内

TEL (0298)-53-6661

印刷 株式会社 イセブ

〒305 茨城県新治郡桜村天久保

TEL (0298)-51-2515

---